

中学校ゴール型におけるネットボールの実践研究

－運動が得意な学習者に着目して－

栗原咲太（宇都宮大学）

1. 目的

本研究の目的は、運動が得意な学習者に焦点を当てて、中学校保健体育科球技領域におけるネットボールの教材の有効性を明らかにすることである。

2. 研究方法

1) 対象：A 県の中学校第 3 学年 2 学級 65 名（男子 35 名，女子 30 名）に対して，2024 年 10 月に実施されたゴール型の授業（全 6 回，12 授業）を対象とした。また，各学級で 1 名ずつ運動が得意な学習者を抽出生徒として設定した。

2) 分析方法：①単元の前後に運動有能感（岡沢ら，1996）および共生体育態度（梅澤ら，2021）を測定し，対応のある t 検定を行った。②毎時間後に形成的授業評価（高橋ら，1994）を測定し，ボール運動を対象とした診断基準を用いて各時間の評価を行った。③関与観察を行い，抽出生徒を中心に授業の様子を記録し，その記録を基にエピソードを記述し，エピソード記述分析（鯨岡，2005）を行った。

3. 結果および考察

1) 運動有能感および共生体育態度

運動有能感では，「統制感」，「受容感」，「合計」において有意な向上が見られた。このことから，ネットボールの授業を通して，子どもたちが「できるようになった」という自信や「教師や仲間から受け入れられている」という自信を持つことができたと考えられる。

共生体育態度尺度では，「リーダーシップ」，「ちがいの受容」，「合計」において有意な向上が見られた。このことから，ネットボールの授業を通して，今まで試合中にボールを触ることができていなかった学習者が，ボールを触ることができたと実感することができるようになったことが推測される。また，ネットボールが性差，身体能力や体格，技能などの個人差がある中で行える教材としての可能性が示唆された。

2) 形成的授業評価

1 時間目では，すべての次元において他の時間と比較して低い評価を示した。しかし，2 時間目以降では，評価に向上が見られた。特に「学び方」，「協力」の次元において高い評価が見られた。このことから，ネットボールの授業を通して，仲間と協力して，チームや自分のめあてに向かって主体的に学習に取り組むことができたことが考えられる。

3) エピソード記述分析

関与観察によって，抽出生徒 2 名のエピソードがそれぞれ 5 個ずつ，合計 10 個のエピソードが作成された。

エピソード記述分析を通して，運動が得意な学習者は技能差がなく行えることや作戦を立てることにネットボールの楽しさを感じていることがわかった。また，ネットボールの授業を通して，ボールを持たない時の動きや，スペースの使い方，視野を広く持つことを意識して取り組んでいたことがわかった。意思決定の選択肢が減らされることによって運動が得意な学習者は物足りなさを感じてしまうという懸念があったが，意思決定の選択肢が減らされたことにより，ボールを持たない時の動きや，スペースの使い方，視野を広く持つことといった気づきへと繋がったことが考えられる。

4. 結論

本研究を通して，運動が得意な学習者は，技能差がなく行えることにネットボールの良さを感じることがわかった。このことから，ルールで制限をつけるなど，技能差を減らすための工夫をすることで，運動が得意な学習者も楽しく活動を行うことができることが示唆された。また，運動の得意・不得意といった「ちがい」を受け入れ，同じチームの仲間として協力して取り組むことができる教材であること，ボールを持たない時の動きに意識が向けられる教材としてネットボールは有効であることが示唆された。